

峯定寺は藤原末期仁平四年（一一五四年）二月、三滝上人の創建にかゝる。三門棟札の文（貞和六年十月修理の際書かれたもの）によれば平治元年十月（一一五九年）この大門は鳥羽法皇の御勅願、藤原信西（貞慶の祖父）が奉行し、平清盛が難宰したことが記されているから、貞慶にとつても因縁浅からざる寺であることが察せられる。釈迦像が如何なる機縁によつて峯定寺に安置される様になつたかは不明であるが納入文書類等より察して、貞慶が造立の始より関係していたことは明かであり、おそらく貞慶の発願により造立され、念持仏とされていたものが何時の頃かに花背の地に安置される様になつたのではあるまいか。又何時、誰によつて彫造されたかも不明であるが、納入文書類の日付によれば正治元年（一一九九年）六月十日（行守結縁文）七月六日（仏舍利塔奉納の日付）とあるから、おそらくそれらの日付と相前後する頃、著名な作者によつて彫像されたに相違ない。貞慶四十

五才の時である。扱て彫像に多くの納入文書類を入れることは当時としてはその類例も極めて稀なることであつたようである。全部で十三点を数えることが出来る。即ち一、水晶舍利塔・一、解深密經要文並に結縁文（貞慶）・一、悉曇文釈迦種子千体、無垢淨光陀羅尼文、仏頂尊勝陀羅尼文、一切如來心秘密全身宝篋印陀羅尼文・一、帰阿弥陀仏の願文・

大悲山峯定寺藏釈迦像と貞慶

成 田 貞 寛
(教授)

一、証阿弥陀仏の願文・二、蓮阿弥陀仏の陀羅尼文・一、行守の悉曇文真言・一、菩提樹の葉に書かれた願文一六点である。以上納入文書類はそれぞれの面から考察する価値ありと認められるが、今は貞慶筆にかかる解深密經要文書の末尾の結縁文を挙げて、彼の釈迦信仰の一端を窺うと共に、彫像との関係を考えて見よう。彼の釈迦信仰に就ては唐招提寺釈迦

念仏願文や諸種の記録に徴して明かであり、その形態についても釈迦、弥勒観音一体としての信仰に帰せられた如くであるが、主体は釈迦であることは申すまでもない。

生々世々発菩提心。値遇大聖報恩利生。自他同証無上菩提。仏子貞慶生々世々。与此沙門常為善友。共詣靈山同仕本師。

彼が解深密經の要文と共に法相守護の諸神諸尊への祈請を表白し、生々世々善友と共に釈尊に結ばれんこと願う真摯なる表情に接することが出来る。悉曇文釈迦の種子千体並に諸種

種の陀羅尼文書も恐らく貞慶の筆にかかると考えられるが、何れにしても釈迦信仰の発露をなすことは疑いない。かかる感慨に於て造像が発願され、多くの結縁者による文書のあることは貞慶教団の行き方を示すものであるとも言ふことが出来る。〔昭和三十四年七月十三日資料調査の覚書である〕